

# 連載に反響 支援の芽

## ここにいるよ

### 沖縄子どもの貧困

⑫

## 第1部 群像

連載「ここにいるよ」沖縄子どもの貧困「第1部」に多くの反響が寄せられた。「胸を締め付けられる思いで読んだ」「このような子どもがいることを初めて知り、衝撃を受けた」「奨学金の返済額の高さに驚いた」などの感想があった。「自分も何かをしたい」「寄付先を知りたい」など支援の申し出も多く、関心の高さが示された。一方、貧困問題の背景を掘り下げ、解決策を示す今後の報道に期待する意見もあった。

1月1日の記事を読んでメールを寄せた50代の女性は「千由ちようたいの文字に涙が流れた。私自身、人生をうまく歩めず、この言葉を何度も言いたくなる状況。自分の生活を立て直せたら、何かしら関わることがしたい」と自身の境遇を重ねながら、心情をつづった。

沖縄県中に記事を読んだという奈良県の大学生(20)は「私も奨学金という名の学生ローンを借りている。学費は値上がりする一方で、借金している学生は想像以上に多い。風俗で働いて学費を稼ぐ学生もいる国のどこが先進国なのか。政府が最優先すべきはこれからの社会を担う若者への投資だと思う」と意見を寄せた。

子育て中の40代女性は「お母さん頑張れ」と電話してきた。「私も電気もとめられるほどの貧困で、お母さんの気持ちがよくわかる。子どもたちはお母さんが頼り。心が折れそうなどきは同じ境遇で生きている人もいる」と思い出してほしい」と共感を示した。

## 現状踏まえて 打開策も取り上げて

那覇市内の高1男子生徒は「沖縄の将来について考えるきっかけになった。この問題が解決されぬまま経済が発展したとしても、格差が大きくなるばかりだ」とメールを寄せた。

うるま市の70代の読者は「子どもには何の責任もない。不自由なまま市で防犯ボランティアに携わる男性は「登校時に学校へ行く様子もなく、うろろろしている小学生がいる。毎日朝食抜きで学校も休みがち。どうかわれほしいか悩んでいる。政治を行う人たちにもっと考えてほしい」と訴えた。北谷町の男性は、連載に対し「今後、現状を踏まえての打開策も取り上げてほしい」と要望した。

県就職・生活支援パーソナルサポートセンター南部所長の濱里正史さんは「何かしたいという機運が盛り上がっている。民間の基金のようなものを創設し、子ども食堂の食料費や場所代、学習支援している個人やNPOの教材代や交通費に助成すると、広がりが出てくる。民間でもできることはやったほうがいいのでは」と話した。



＝第1部おわり (第2部は3月上旬から掲載)